
庭付き4LDK中古住宅 リフォーム済嫁付

エスキュ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

庭付き4LDK中古住宅 リフォーム済嫁付

【Nコード】

N5632Z

【作者名】

エスキユ

【あらすじ】

宝くじで一億当たったから、マンション買ったので、この家、リフォームして売りました！・・・母親の爆弾発言に啞然としながらも引越しがいつなのか聞いたら、「珠希付きで売りました」と言われた私。どうやら、家ごと売り飛ばされたい。ええ?! 本気、お母さん!? やってきたのは大きな犬を連れた草食系の年上男性。私、本当に結婚しちゃうの? 全10話の中編となります。(年内完結)お暇なときにでもどうぞ。タグの通りの作品なので恋愛要素は低めです。ご注意ください。

ブログ いつまでもあると思うな、親と金(前書き)

本日から、10日間。

のんびり、更新します。

宜しくお願いします。

プロローグ いつまでもあると思うな、親と金

「お母さん、宝くじ、当たっちゃった!」

御歳60の母君は、キヤハツ と気持ち悪い声をあげながら、三十路突入したばかりの一人娘の私にそう言った。

「何? 1万でも当たったの?」

私は冷蔵庫から牛乳を取り出しながら、そう問いかける。少しでも背が伸びてほしいと幼稚園から牛乳のんで26年。残念ながら育つたのは胸だけだ。

若い頃は150センチに満たない身長と、Fカップでロリ巨乳なんて言われたが、女も30過ぎれば、ロリなんて付くわけもなく、

「お前って残念な女だよな」と同情される始末だ。

好きで結婚しないわけじゃない。

男を見る目がないだけだ!

と内心、自分を落としながらも牛乳を飲んだ瞬間、母親の一言は正に爆弾だった。

「当たったのは一億」

ぶーー!!!

「そのお金でマンション買ったから、お父さんとお母さん、この家出ていくね」

ぶーーー!!!

「この家は、リフォームします。そして売ります。あ、買い手はついているのよ」

「ついでるじゃないよ！ そんないきなり言われても！ 引っ越し
いつよ!？」

口元を拭いしつつ母を睨めば、母は笑いながら言う。

「あら、珠希は引っ越ししないわよ？」

「……………は？」

「珠希付きで、売りました」

「……………はあ？」

一瞬、聞き間違えた。

凄く変な風に聞き間違えた。

そうでなければ、そんな人身売買紛いのことあり得る訳がない。

そう思っていた筈なのに、母は違ったらしい。

「来月から、珠希の旦那さんがくるから、珠希、仲良くしなさいね」

何、その、犬猫がきますみたいな軽いテンション。

私のテンション、急降下、だ！

「冗談だよ、お母さん？」

「冗談じゃないわよ、珠希」

母は満面の笑みだが、目が笑っていない。

「28で会社の男に二股かけられて居辛くなつて会社辞めたのは仕方ないわよね。

それからバイト初めて、彼氏出来たと思えば、ギャンブラーやらフリーターやら、禄でもない男ばかり。しかも就職もできない」

「し、仕方ないじゃない！ 三十路過ぎのスキルなし女なんて、雇ってくれる会社ないんだもの！」

「お見合いしろといつても、自分で選ぶとわがままばかり。しかも、

ましな男を選んでくるかと待てば毎回、金も稼げないバカばかり。

珠希、お勤めしていた頃の貯金、もうないわよね？」

「うっ！」

虎の子500万は、毎年知り合う男どもに貢いでなくなった。

悲しいかな、私は現在、無職。2カ月前、バイト先の飲み屋の25歳フリーターに二股駆けられ（しかも職場内で私の方が浮気相手だった）、退職したばかり。

この父の持ち家と、母のご飯で生き長らえていると言っても過言ではない。

「だから、お父さんとお母さんで、素敵な男性を見つけてきました。先週、夕飯食べにきた男の人、覚えてる？」

「え？ お父さんの会社の人？」

確かに珍しく来客があった。

いきなり夕飯を食べていくと言われて、私は渋谷外にハンバーガーを食べに出かけたのだ。

流石に父の会社の人に、無職で家事手伝いのデカイ娘がいるなんて、わざわざ顔合わせしたくない。

それでもチラリと挨拶だけはして、その時見た顔は、私より少し年上の落ち着いた男性に見えた。

銀色のフレームの眼鏡が印象に残っていた。

「あの人、お父さんの会社の人じゃないから」

「ま、まさか・・・」

「そう、珠希の旦那さんになる人よ」

くらり。

一瞬、目の前が暗くなった。

よく見ておけば良かったなんて、少ししか思っていない。

寧ろ、このじわじわとくる逃げ道のなさが怖い。
怖すぎる。

「お、お母さん、そこに私の意見は．．．？」

「お母さん、去年、お見合い持ってこようとしたとき、珠希に言われたわよね？」

『来年までには彼氏くらい見つけてやる！』って

「い、一応、彼氏できたじゃん！」

「あんた、彼女じゃなくて、セフレ扱いだったでしょ！」

じ、実の親にセフレ扱い。

もう、色々ダメージが多すぎた。

「だから、お母さん、この家付きであんたを売ることになりました」
「き、決めましたって．．．．」

いやいやいや！

宝くじ、当たったんでしょ、お母さん！

それ、私に分けてくれるとかないんですか？

色々、オロオロしながら母に言ったが、母は
容赦がなかった。

ピシヤリと私が伸ばした手を叩くと言い放つ。

「いつまでもあると思うな、親と金！」

母よ、何で宝くじなんか当たった？！

1 婚姻届の書き方

「これに珠希さんの名前を書いて貰えば、完了です」

そう、目の前の男は私に言った。

夕暮れ時、斜陽差し込む我が家のリビング。

今までであったテレビは地デジ対応の大きなテレビになっていたし、ソファも革張りだ。

古臭い家だったはずなのに、パツと見、大型家具量販店のモデルリビングみたいに綺麗だ。

リフォームは怒涛の勢いで行われた。

元々、築30年に満たない家だったので、壁紙張り替えやら、システムキッチン入れ替え、ユニットバス入れ替えで済み、1ヶ月という有り得ない工程でも、すんなり終わってしまったらしい。一階だけ若干間取りが変わって、中だけ見たら新築の家みたいだ。

二階の私の部屋は一切手が加えられず、壁紙張り替えなどが父と母の寝室だけ行われて、昨日その部屋に大きなクインサイズのベッドが搬入された。

誰の？

一体、誰が寝るの？

なんて、怖くて聞けるか！！

「じゃ、呉々も晴哉くんに宜しくね！」

「……………珠希、頑張れ」

昨日、そう捨てぜりふを残して、父と母はこの家から車で10分のマンションに帰っていった。リフォーム中、私もお邪魔したが、宝くじで買った割には極々普通の中古マンションだった。母のことだ、老後の蓄えに殆ど回しているのかもしれない。

それなら、何故にあの家を売る?!

と思っただが、二人が片付けたかったのは家じゃないことは、薄々感じてました。

家付きならば、売れるだろう。

そう踏んだ訳ですよね? お父さん、お母さん………

そして、今日。

「ワン!」

元気な声で挨拶してくれたのは、可愛いというよりデカいの一言の、ゴールデンレトリバーのワンちゃん。そしてワンちゃんは、スラリとした長身の男と一緒に現れた。

「カインです」

男は先に犬の名前を名乗り、愛おしげにカインの頭を撫でる。カインは尻尾をパタパタと嬉しそうに振っている。

「はあ」

「私は西永 晴哉と申します」

「えっと……田中 珠希です」

「じゃあ、明日からは西永 珠希ですね」

おおっと、サラッと何か言いましたよ、この男。

私は顔をひきつらせながら、「本気ですか?」と問いかける。

今なら、冗談ですって言われても許す。

いや、そうであってほしい。

なのに、母同様、得体の知れない笑みを浮かべて、「すみません、カインを上がらせたいんで拭くもの貰えますか?」と逆に問われた。

男に罪はあつても犬に罪はない。

私が渋々、雑巾を持ってくると、「ありがとう」と言いながら、男は雑巾を受け取る。

長い指に節くれだった手。

父親とは全く違う、私の付き合ってきた歴代の男とも違う、綺麗な手だ。

まあ、手だけで嫁になるほど、私は安くないけどね！

そう思っていたら、いつの間にかカインと男に上がられて、いつの間にかリビングにつれてかれ、私の家なのにいつの間にか男にコーヒーを用意されていた。

「このコーヒーメーカーまで、用意して貰えて、お義父さんたちに感謝だな」

どうやら男のリクエストのコーヒーメーカーだったらしい。

私は？

私のリクエストはないんですか？

そう思えども、父も母もないリビングで、私の味方は1人もいない。

というか、1ヶ月前にいわれてから、本日、二度目の顔合わせ。

一回目なんか、挨拶しかしてないというのに、それで結婚なんて、私の両親はいかれてるだろう。

内心苦汁ながら、我が家なのに、だされたコーヒーに口をつける。大変、美味しいです。

「珠希さんもブラックなんだ。コーヒーの趣味があいそうだね」

男が何か言ったが無視だ。無視。

犬は好きだから、こちらによってきたカインの頭は撫でてやる。嬉しそうに私の膝に乗ってきて何て可愛いんだろう、コイツ！

こういう大きな犬、飼ってみたかったんだよなあ、とぼんやり思っていたところで、冒頭の男のセリフに戻る。

男が差し出してきたのは婚姻届。

はい、私、この家と一緒に男に売られました！

「本気で我が家を私付きで買ったんですか？」

私が真顔で問いかけると、男はニッコリ笑って、

「はい」

と返事をした。

「いくらで？」

「私の将来性でかったださったそうです」

「は？」

「将来、ご両親のうち、どちらかが亡くなられたときに面倒を見るのと、珠希さんを一生可愛がるって約束です。」

だから、私の将来全部を珠希さんたち、ご家族に」

「.....」

リフォーム後、一階に出来た客間は、将来の親用だったのか。畳の部屋で、何でもこんな仏壇でもおきそうな部屋をと思ったが、まさか自分たちの片割れの面倒までお願いするなんて.....。

一瞬、目の前が真っ暗になった。

いや、比喻ではなく実際そうで、私の顔にカインが近づいて舐めてきたから真っ暗になったのだ。

私はカインをガシリと捕まえて、ワシヤワシヤその腹をかき混ぜながら、

「正気ですか？」

と今度は男の頭を疑う。

「正気ですよ。本当はカインと二人で暮らせる家を中古で探してた

んです。その時、お義母さんとお会いしまして、この家を薦められました」

「わ、私付きで?!」

「いえ、その時は家だけだったんですが、お話している内に、ならば自分の娘も付けたら家を譲ってくださいとのおっしゃるので」

バカバカバカバカバカバカバカ。

お母さんの、大バカ!

どこの世界に、意気投合して娘を譲る母親がいるんだ!

ここにいます

私はぐったりしながら、カインの腹を撫でる。このもふもふが落ち着く。

男はそんな私を見ながら微笑んでいる。

「だからってまともに会話もしてない私と結婚なんて」

「お義母さんから珠希さんのことは聞いてます。とても素敵なお嬢さんだと思いましたが、私には勿体ないと思ったのです」

いえ、あなたの方が勿体ないです。

と思わず言いたくなった。

目の前の男は、着ている服はカジュアルだが、どこかのブランドものらしいマークが胸元にワンポイントであしらわれていた。それだけでも金があると分かるが、眼鏡だって安売り眼鏡じゃない。さっき、横を歩いたとき見上げた眼鏡のつるにもブランドロゴがついていた。

だから、間違いなく金はあるはずなのだ。

そして、顔。

凄い美形ではないが、優しげで草食系男子って言葉が似合いそう

な面持ちだ。

性格だつて、今話した限りでは、穏やかそうで、余程変な性癖でも無い限り、35歳らしいが恋人がいないとは思えなかった。

そんなことを思っていたら、男が自分には勿体ない理由をあげてくる。

「実は私は2カ月前に離婚しています」

また、それは何で？と思っても、口にしないくらいの嗜みはあったのだが、男は勝手に話してくる。

「元妻との間には、子供がおらず、カインだけでした。私は父親が死別で、母は離婚して子供の頃に連絡を絶っておりまして。妻の家に婿入りしました」

「婿入り・・・」

失礼だが、凄く似合っている、と思った。
元婿養子は話を続ける。

「しかし、両方異常はなかったのですが、なかなか子宝に恵まれず・・・。ですが2カ月前、妻が妊娠しまして」
「それはめでたいことじゃないですか」
「相手は妻の勤め先の男でした」

どこのドラマですか？

あんぐりと開いた口が塞がらない私。

男は苦笑しながら、ことの顛末を語る。

生まれてくる子供の父親を正しくするために、早々に離婚。（それでも結婚期間中の妊娠だったので出産後に遺伝子鑑定とかして、元妻側で色々申請するらしい）

カインだけは男が引き取り、慰謝料などもなく円満離婚して、今にいたるらしい。

「いや、円満じゃないでしょ、それ！

あなた、もつと怒らないと！」

私がそう男に詰め寄ると、男はやんわりと微笑んで、

「私じゃ彼女を幸せに出来なかったから、仕方ないです」と言った。

「そういう問題じゃないでしょう！

仮にも夫婦になったなら、不倫なんてする前にきちんとして決着つけるべきだったでしょうよ！」

子供できたから離婚って、馬鹿にするにも程がある！！」

私が息まくと、男はそんな私を見ながら、

「でも離婚したから、珠希さんと結婚できます」

と言ってきた。

そこでここに戻るか、普通？！

いや。もういきなり会ったばかりの女と結婚しようと思うんだから、どっかおかしいのだろう。

「私なんかでいいんですか？！ もう若くないし、無職ですよ？！」

「珠希さんだからいいと思いました。お義父さんたちもとてもいい

人で、こんな人たちの育てた娘さんなら、私も幸せになれるかな、

と行ってしまっただんです」

う。卑怯です。

男の笑顔は切なげで、その顔には離婚までの道筋が決して円満ではなかったことを物語っていた。

そんな男が、私の両親を見て、私の両親に幸せを見いだすって、どんだけ寂しかったんだろう、と思わずにはいられない。

お母さん、あなた計りましたね？

と、内心、母に向かって問いかける。返事があるわけないが、母は私を育てただけあって、私の性格も熟知しているのだ。

離婚歴がなんだ。

人柄だ。

愛情だ。

そんなことをのたまう母の顔がすんなり思い浮かぶ。

私の男を見る目のなさも、この情けに弱いところに起因している
といい加減、分かれ、と母に言いたい。

いや、分かっているから、こうなのか？

「私と結婚したいんですか？」

「珠希さんと結婚したいんです」

目の前には紙切れ一枚。

ご丁寧^ごに私の名前を記入するのみだ。

というか、証人欄に既に私の父の名前が書いてある。男の方にも見たことない男性の名前が書いてある。きっと友人か誰か信頼できる人なのだろう。

準備は万端らしい。

私はため息をつくくと、ワシャワシャワシャワシャとひたすらカインを撫で回した。

「カイン、可愛いですね」

「実物の珠希さんも可愛いと思いました」

「その甘い言葉は仕様ですか？」

「はい。珠希さんを一生、可愛がるってご両親と約束しましたから情に流されるな、と誰かが私の中で警告したが、そんな警告で何とか成る性格だったら、とっくの昔に結婚してるわ！

私は無言でペンを持つと、自分の名前を婚姻届に記入した。男が嬉しそうに微笑んでくる。本当に嬉しそうだ。

「宜しく願います、珠希さん」

「.....宜しく願います、晴哉さん」

その日、私は結婚することになった。バツイチ、犬付き男と。

(明日から) 田中改め西永 珠希、30歳。

どうなる、私？

どうする、私？！

1 婚姻届の書き方（後書き）

婚姻届の書き方、本籍の移し方などを詳しくお知りになりたい方は、最寄りの市役所にお問い合わせてください。

思いついて結婚しようとしても、日本では、本籍外の役所にての申請は手間がかかります。

2 結婚って

「私の私物は明日の午後に届くので、午前中の内に届けを出して、買い物しましょう」

簡単に私が作った夕飯後、晴哉さんがそう言った。

いつてらっしゃい、と思ったが、多分、私も一緒なんだろうなあ。

明日にはこの男と夫婦になる。

そう思うと何だか変な感じた。

お互いのことを直接知らなくても、結婚って出来てしまうんだな、と思ってしまう。

若い頃はもつと夢見ていたし、三十路になった最近焦りもしていたから、凄く大変なことのような気がしていたが、いざするとなると、紙切れ一枚、役所に出せば済むのだから、凄いと思う。

そう言えば晴哉さんは、以前どこに住んでいたのだろうか、と婚姻届を見ると、二人とも同じこの家の住所になっていた。

「あれ？ どうして住所が一緒なんですか？」

「今日、こちらに来る前に住民票の異動をしてきました」

「何でまた？」

「その方が明日の手続きも早くなるんです」

よく分からないが、本籍とか住民票とかの処理をしてからの方が早いらしい。そう言えば、この前結婚した友人は、旦那が他県の人で、戸籍を取り寄せてなかったから書類不備で入籍したい日に入籍出来なかったなんて言っていた。

「私たちの書類ってこれだけで大丈夫なんですか？」

「後は私の転籍届です」

「転籍届、ですか？」

「戸籍にバツがついてるんで、こちらを本籍にさせてもらいました」
「そうするとどうなるんですか？」

「私の戸籍に珠希さんが入るとき、バツが見えなくなってます。追っていけば分かるんですが、珠希さんも初婚ですし、綺麗な戸籍で迎えたいと思ってます」

「はあ……」

離婚すると戸籍にバツがついてるのか、とか、本籍移せば、バツが見えなくなるとか、ちょっと知りたくない知識を知った気がする。
「あ、でも珠希さんの戸籍にバツをつけることは決してしませんから、安心してください」

ニコリと晴哉さんは紳士的に微笑んだ。

「家計のこととか、色々珠希さんをお願いしていくことになります
が、どうぞ宜しくお願いします」

ああ、結婚したら、そういうことも管理してかないとならないのかあ、と思った。

何か、結婚つて、本当、夢見るだけじゃ駄目なんだな。

生活していく為に、色んなことをしていかなくちゃならないってことに、改めて気づかされたけど、今更「なしで！」って訳にもいかないだろう。

だって、この人、喜んでるよね？

たった二回しか会ってない私との結婚。

不安とか全くなく、嬉しそうにニコニコしてる。

その笑顔を見ると、無しにはできないよなあ、と思う。

「ところで珠希さん」

「はい」

「今晚はこちらに泊まってもいいでしょうか？」

「

やんわりとオブラートに包まれた言い方に、ドキリとする。
そうか、明日から夫婦だもんね、

やることだってやるよね！

今更、処女でもあるまいし、出し惜しみするつもりもない。

目の前の男がありがたしなしかで言えば、流石、我が母の眼鏡にかな
っただけあって、私、十分、イケます。

「ど、どうぞ。明日から夫婦なんですから、遠慮しないでください」

「寝る部屋って・・・」

「夫婦の寝室が、既にリフォーム済みであります」

「え？」

「はい？」

晴哉さんは目を大きく見開いてから、恥ずかしそうに「あ、すい
ません」と謝ってきた。

「あの、ですね。」

特に他意はなくて、ただ、カインに早くなれて貰いたくて・・・
「」

犬の為かい！！

カアア、と頬が赤くなる。

勘違いした自分がたまらなく恥ずかしい。
というか、イケるとか考えた私、マジで最低だ。

目も合わせられず俯いた私をどう思ったのか、晴哉さんは優しい
声で言う。

「珠希さん、ゆっくりでいいですよ」

「はい？」

顔をあげると晴哉さんの穏やかな笑顔と目が合った。

晴哉さん、本当に草食系だな。

笑顔が神々しい。

「ゆっくり、夫婦になっていきましょう」

「ゆっくり、ですか？」

「はい。目を合わせて会話をし、お互いを知って、手をつなぎましょう。」

夫婦になることが先だけど、そこから始まる愛情があっても、私
はいいと思います」

優しい声に、情欲なんてものは全くなく。

寧ろ、熟年夫婦のような穏やかな物言いに、私も気がついたらほ
ほえみ返していた。

凄くドキドキするわけでもない。

ただ、いい人だな、と心がほっこりした。

そして、この人と結婚したら、きっとお爺ちゃんお婆ちゃんにな
っても、こんな風に穏やかに会話が出来るだろうな、と未来が想像
出来てしまった。

今までの彼氏と、結婚とか、新婚の未来ゆめは想像したけれど、老後
を想像したのなんて初めてで、でもそれが全然、嫌じゃない。

「お爺ちゃんお婆ちゃんになっても、こんな感じですか？」

思ったことを口にしてみると、馬鹿にした声が返ってくることは
決してない。

晴哉さんは寧ろ私の問い掛けがとても嬉しかったらしく、更に口

元を緩めて笑みを浮かべてくれる。

「いいですね。お爺ちゃんお婆ちゃんになってもこんな風に、のんびり日だまりで珠希さんとお話したいですね」

その言葉が穏やかで、その想像した未来があんまりにも穏やかで、思わずにっこり微笑んでしまった。

私が今まで結婚出来なかった理由が分かった。

結婚って、生活で、

そして、

未来を想像できる人としないと駄目なんだ。

3 指輪

「おめでとございます」

朝一で届け出を出したら、市役所の人にそう言われた。月曜の朝一番。昨日、遊び疲れしましたか、おにいちゃん、なんて私は内心思いながらも、「はあ」と曖昧に返した。

カインは家の中で大人しくお留守番だ。

晴哉さんの初めて二人きりでしたことが、婚姻届提出だなんて、色んな意味で、私、劇的すぎるだろう。

「これで西永 珠希ですね」

「よ、宜しく願います」

「此方こそ宜しく願います」

差し出された手に、握手かと思って手を差し出せば、そのまま繋いで晴哉さんは歩き始める。

いい歳して手を繋いで歩くななんて恥ずかしくないの？

なんて私の視線は全く気付かれない。

何というか、私の旦那様になった人は見た目以上にマイペースなようだ。

「この後、警察署にいつて免許の書き換えですね」

「あ、だから住民票と戸籍抄本が必要なんですか」

「珠希さんは名字も変わりますからね」

流石、二度め。

色々詳しいな、と思っていたら、晴哉さんははにかみながら、

「日曜日に住民票の移動がたら聞いといたんです」

と返してくれた。

「最近市役所も土日簡単な受付はしてくれるから助かりますね」

成る程。

わざわざ調べてくれていたらしい。

邪推してすいません、と内心謝りながら、晴哉さんの車に乗り込む。警察署にこのまま移動するからだ。

晴哉さんの車は7人乗りタイプだが、犬も乗れるように後部座席がフラットになっている。だから、私は助手席に座る。

きっとこの車は犬用に買ったんだろうな、と思った。

「カインのこと、可愛がつてるんですね」

何の気なしにそう言えば、

「珠希さんが犬嫌いではなくて良かったです」

と運転しながらほほえまれた。

「犬嫌いの人は、匂いで駄目ですから」

「カイン、匂わないと思いますよ」

「犬が苦手な人には敏感に分かってしまうんですよ。獣臭さが。」

だから、カインを家にあげるときも抵抗なくあげてくれて、カインみたいな大型犬でも臆さず接してくれる珠希さんのような人は貴重なんですよ」

お、無自覚に彼の中で私の好感度は上がっていたらしい。

「カインは私にとって子供のようなものですから」

子供がいなかったという晴哉さん。

カインに向けられる愛情が深いのは、見ているだけで分かった。

「な、なるべく私も子供みたいに接した方がいいですか？」

晴哉さんにとって子供なら、結婚した私にとっても子供だろう。

そう思っただけなら、晴哉さんは首を横に振った。

「珠希さんには、家族と思ってもらえるだけで十分です。」

それに私たちに子供が出来るかもしれないから、その時、犬と子供の序列をきちんと

しなければなりませんし」

うおう。

サラリと爆弾発言。

やることやってないのに言いますね。

思わず俯いてしまうと、晴哉さんは小さく笑ってから、

「ゆっくり家族になりましょう」

ともう一度、言ってくれた。

今まで子供がいる自分なんて想像したことさえなかった。

ただ、淡々と毎日が変わらず過ぎていくと思っていたから、晴哉さんが来てからのこの二日は、何だか凄く目まぐるしい。

普通はもっとゆっくり慣れていくだろうに、それがないからだろうか。

本当に、ぐるぐる、ぐるぐる超高速回転のティーカップに乗っているみたいな気分だ。

警察署での手続きは、することを知っていたせいか、すんなりと終わった。

それでも10時半は過ぎたので、そのまま帰るのかと思ったら、買い物があると言われた。

そして連れていかれたのは、最近出来た郊外型店舗集合施設。きつと日用品が足りないだろうと、テレテレ後をついていったら、ついた場所は宝飾店だった。

「へ？ え？」

「すみません、いきなり連れてきて」

「西永様、お待たせしました」

お店の人が出てきて出されたのは、指輪。

「あ、あのー、晴哉さん？」

「本当は一緒に選びたかったんですが、お義父さん、お義母さんが選んでくれました」

苦笑いする晴哉さん。

あー．．．お母さんが無理やり晴哉さんを連れてきて決めている姿が目には浮かびます。

お母さん、こういうのは娘に決めさせてよ。

と内心愚痴りはしたが、次の瞬間、サプライズがきた。

「だけど、婚約指輪は決めてなかったので、珠希さん、好きなものを選んでください」

「え？」

晴哉さんはニッコリ笑って、

「婚約指輪位、珠希さんの好きな指輪をどうぞ」と言った。

「ええ?! いや、そんな!」

「結婚指輪と重ねづけできるのもあるですよ。お義母さんが選んだ結婚指輪、ラインが綺麗ですから、どの指輪とも合いますよ」

「は、はあ．．．」

ずらりと並んだ指輪を端から見ている。

一番手前にあるのが、お母さんが選んでくれた結婚指輪なのだろう。確かに無駄な装飾はないし、ラインが綺麗で、私好みだ。

それと対になる婚約指輪なんて、どうやって選べば．．．．．なんて思っただけで眺めていたら、一粒石が大きい指輪で視線が止まる。どう考えても、高いだろう。

だけど、ダイヤの横に寄り添うように、小さな淡い乳白色の石が3つ並んだ形がとても可愛くて。

「これですか？」

「え、あ、その!」

躊躇うより早く、左手をとられて、薬指にまず結婚指輪を嵌められた。そして、私が見ていた指輪をその指輪に重ねづけられる。

寄り添うように嵌められた指輪は、互いが互いを邪魔することなく、まるでそれで一つの指輪みたいに、ピタリと指に嵌まった。

「お似合いですよ」

「珠希さん、どうですか？」

店員さんにはほめられ、晴哉さんにはとろけるような笑みを向けられ、私は呼吸困難のふなみたいに口をパクパクするしかない。確かに似合っている！

私好みだ。

だけど、値段！

値段を見てしまった。

給料三ヶ月分なんて逸話は、今は廃れているって私だって知っている。

だから、晴哉さんにしてみれば一ヶ月分位の値段だとは思う。思うが40万近い金額の指輪を嵌めるなんて、一昨日まで無職家事手伝いの私にはハードルが高すぎるだろう！

そう思っていたのに、晴哉さんはなんてことないかのように、
「気に入っていただけのなら、これにしましょう。」

サイズは結婚指輪と同じサイズで」

と店員さんに頼んでしまった。

「ちょ、ちよつと、晴哉さん！」

私がワタワタしながら晴哉さんを見ると、晴哉さんはニッコリと笑いながら言う。

「ダイヤの脇の石はムーンストーンらしいです。最近は婚約指輪にダイヤ以外の石がつくものもあるんですね」

呑気に世間話してる場合ですか。

「お、お金！」

「あ、指輪は結婚指輪もこちらも私が出します。それ位、私にさせてください」

「そういうことじゃなくて！」

「幸せにしますから」

「！！！！」

今、ここで、言う！？

「……でっ！！」

真っ赤になった私の前で、店員さんが微笑んでいる。

あー、もうここにはこない。というか、来るお金もないけど。

黙りこくった私を、了解したと勝手に解釈して、婚約指輪は決まっ
ってしまった。

因みに結婚指輪は、既に仕上がり済みだったらしい。

一ヶ月のリフォーム期間、父と母よ、娘の知らないところで色々
と勝手にしないでほしい。

結婚指輪が、私好みな分だけ質が悪い。

「お義母さん、本当に珠希さんの好みを分かってるんですね」

指輪を嵌めたまま二人で店を出ると、晴哉さんにそう言われた。

「まあ、母親ですからねえ」

そうばやく私を、目を細めながら晴哉さんは見つめる。そして、
しんみりとした声で、

「その指輪、大切にしてください」

と願うように囁かれた。

例え、成り行きとはいえ結婚は結婚だ。

きつと、前の結婚がうまくいかなかったから、今回は大切にしたい
んだろうな、と思った。

それにしても、会って二回で結婚とか、どうかと思うけど！

キュッと右手を握られた。晴哉さんの左手にはキラリと光る、私
と対の、ピカピカの結婚指輪。

うん

成り行きではあるけれど、この指輪の輝きがくすんでも、大切に
はしたいなあと思った。

そこに恋とか、愛とかは、まだ全然なくても。

4 専業主婦

田中改め、西永 珠希。30歳。

今日からピチピチの専業主婦です！

キラキラの結婚指輪が眩しいし、昨日からは同じ部屋で寝ました。

真ん中にカインが寝てたけどな！

いつもはそんなことないらしいんだけど、新しい家に落ち着かなかつたらしい。

まあ、暫くはカインが真ん中でもいいんですけど！

別に昨日の夜はお気に入りの下着だったなんて、どうでもいいことなんですけど！

とりあえず、今朝も外見は変わらないが、中身だけはお気に入り下着のまま、朝六時に起床した。

初めての愛妻弁当です、と。

著しく眠いけど、晴哉さんは離婚するまでは奥さんのお義母さん手製弁当だったらしく、そこは現妻としては、張り合いたいというか、専業主婦なんだし、それ位しかまだしてあげられることが分からないから、頑張りますよ。

まあ、メインが冷凍なのは許してほしい。

二度寝はしない質だけど、起きてすぐにテキパキは動けない。半分寝ぼけながら、冷凍食品を冷凍庫から取り出し、チンしていく。

弁当箱は、昨日買ってきたものだ。

ほつれん草のゴマあえだけは、手作りした。

と言つても、冷凍ほつれん草を解凍して作ったから、それが手作りだなんて、図々しいにも程があるかもしれないが、今はこれが私の精一杯。

母がいたときは、母に家事を任せきりだったから、思った以上にお弁当作りはハードだった。

七時に晴哉さんが起床。

「おはよう、珠希さん」

パジャマ姿の晴哉さんは、少し眠そうな顔で、何だか微笑ましい。「おはよう、晴哉さん」

笑って返せば、晴哉さんは既に起きているカインの頭を撫でながら、椅子に腰掛ける。新しい我が家のキッチンはアイランドタイプという名前の対面キッチンだ。

流しのすぐ横にテーブルがあつて、椅子が並べてあるから、用意がすぐにできるし、片付けも楽だ。

私は晴哉さんの前に、コーヒーと小さなパンを一つ置く。朝は食欲がないらしく、これだけらしい。

そしてカインのドッグフードも、カイン専用の食事場においてやると、カインは尻尾をバタバタ振りながら、ご飯を食べる。

犬を飼うのは始めてだけど、可愛いなあ、と思う。
私、犬が苦手じゃなくてよかった。

ふふふ、と小さく笑ってから、私も自分の分のご飯を用意して、晴哉さんの対面に座る。

「いただきます」

「いただきます」

親といた時だつて、そんなことしなかったのに、何となく二人声を揃えていた。お互いに目を合わせると、晴哉さんも少し照れくさかったのかはにかんでいた。

簡単な食事を済ませた後は、八時に晴哉さんは車で出勤していった。晴哉さんのお勤め先を聞いてみたら、この辺では大きな工場勤務だった。その品証課長だと聞いて、少なからず驚いた。35で課長職つてかなりのエリートさんじゃないですか。

一応、28までは会社勤めだったし、晴哉さんの会社は大きいので、私の勤めていた会社との取引もあった。だから、あの工場の課長職がどれだけ凄いかはわかる。

悔しいけれど、今のところ、晴哉さんに欠点らしい欠点は全くなくて、母親の審美眼の正しさに平伏するしかない。

もし、私が自分で結婚相手を探していたら、同じバツイチでも、風俗好きだとか、金遣いが荒い男としか結婚出来なかった自信がある。自信ていうか、見る目がないんだと思う。

第一、自分で選んでいたら、まず間違いない、晴哉さんのような草食系のラマみたいな人、絶対選んでない。顔は悪くないけれど、申し訳ないが、私の好みでないからだ。

それでも3日一緒に暮らしても、嫌になつたり、生理的嫌悪を抱かないのだから、今までの私、本当、何を基準に男を選んでいたらと自分で過去の自分に問い質したい。

「何だか、一緒にいて、楽なんだよなあ」

ポツリと独り言を呟けば、「そうでしょ？」と言わんばかりに、カインが「ワンっ」と元気に吠えた。

洗濯を終えて、掃除をしたら、午前のカインの散歩だ。大体、1時間位してあげるといいらしい。晴哉さん曰く、カインは私が散歩をするようになってから、散歩回数が1日二回に増えて、とてもご機嫌らしい。

今までどうしていたのだろう、と思ったら、離婚してからはペットシッターなんてものを雇っていたそうだ。

私付きの家だったから、これからはペットシッターも不要だろうが、私の存在意義が、ことごとくペットに関わることばかりってのは、ちよつと切ない。

まあ、大した料理も作れないし、家事が凄いで得意でもないから、これくらいで「いてもらって助かった」って思っただけなら、安いものだよなあ、と思わなくもない。

久しぶりに外をがつつり散歩したら、うつすらと汗をかいていて、お昼の納豆ご飯が凄く美味しかった。

テレビを見ながら、納豆ご飯を食べていたら、ランチ特集なんたのをやっていて、晴哉さんが休みになったら、カインを連れてドッグランのついたレストランに行くのもいいな、なんて思ってしまう。

お昼を過ぎたら、洗濯物を取り込んで、夕飯の買い物に行く。カインの午後の散歩も兼ねたから、かなり時間がかかって、帰ってきたら4時を過ぎていた。

お風呂を洗って、スイッチ予約しておいて、夕飯の準備。

今日は頑張ってカレイの煮付けと、野菜炒め、ほうれん草の味噌汁だ。一汁一菜だけど、晴哉さんはこれで満足してくれるだろうか？と思いつつ、くつくつ煮ていたら、電話が鳴った。

「はい、西永です」

慣れないなあ、と思いつつ、そう名乗ると、

『あ、珠希？』

と元気な声。

「あ、お母さん」

『どう、新婚生活は？』

「まだ3日目だし」

しかも、きちんと主婦業したのは今日が初めてだ。

『晴哉さん、いい人でしょ？』

得意気な母の声に、否定できないのが悔しい。

「まだどんな人か分からないし」

『でも、珠希のこと、大事にしてくれるでしょ？』

「う．．．．．」

珠希さん、って呼んでくれる晴哉さんの声に、たった3日で馴染んでいる自分がいるから、強く返せない。

珠希、って呼びつけでもいいのに、凄く丁寧にさん付けされている。しかもそれがよそよそしいわけじゃなくて、優しいから、困る。

惚れっばいわけでもないのに、その優しさに絆されそう。

『幸せになりなさいよ』

いきなり、母親がそんなことを言ってきた。

「はあ？　いきなり言われても．．．．．」

『お母さん、神様なんて信じてなかったけど、今回だけは感謝した』

「まあ、宝くじ当たったもんね」

そのお金を娘に分けるどころか、家ごと売り飛ばすとは思いませんでした。

電話の向こうで母親がケラケラと笑っている。

ガヤガヤと何だかうるさいので外なのだろう。

「今、どこ？」

『羽田。これから飛行機乗ってお父さんと沖縄行ってくるから』

「はあ?!」

ちよ、父よ。会社はどうした?

『お土産はちんすこうね』

言うだけ言つて、ガチャリと電話が切れた。

私は電話を見つめながら、

「本当、何でもアリだな...」

と我が母のことながら、感心してしまう。

ふと、焦げ臭い匂い。

「ぎゃあ、煮付け?!」

私は叫びながら、カレイの煮付けに戻った。

その日、晴哉さんが帰ってきたのは8時過ぎだった。遅いときはもっと遅いらしく、今日は比較的早い方らしい。

「定時は、そんなにないかも。ごめんね」

着替えながら、晴哉さんにそう謝られた。

昨日より、敬語がなくなっているのは、慣れたからだろうか。

まあ、一緒に寝てる(カイン付き)し。

少しは親密にもなるよなあ。

その碎け方が嫌じゃなくて、寧ろ嬉しく感じるのは、私、もうどつかしらこの人に惹かれてるんだろうなあ、と自覚せざる得ない。

「ごめんなさい、カレイの煮付け、少し焦げて」

「そう? 美味しいよ」

二人で食べる食事は、思ったより楽しい。

「会社で扶養申請出したら、驚かれたよ」

「そりゃ、そうでしょうねえ」

少なくとも二ヶ月前に離婚で、色々届けの変更もしたのだろうし、まさか舌の根が乾かない内に再婚だなんて、思いもしないだろう。

「カインと結婚したのかなんて言われた」

「ははは！」

確かにカインは女の子だし、晴哉さんの可愛がりようならそう思われることもあるだろう。

「今日はどうだった？」

「ん？ 普通に家事してたら、あつという間に1日過ぎちゃった。専業主婦つてもっと楽なのかと思ったよ」

本当、時間の過ぎる早さに驚いた。

「そう。きつと慣れたら自分の時間も作れるよ」

「え、そうしたら私、昼寝しそう」

「はは、してもいいよ。夜、俺にお帰りって言うてくれるなら、何してもいいよ」

あ、初めて自分のこと、俺って言った。

そう思ったけれど、それ以上に言葉の内容に思わず胸が痛くなる。

この人、今までお帰りって言われてなかったのかな。

言われていたら、こんなこと言わないだろう。それに、嫁の親と同居していたら、挨拶位、交わさなかったのだろうか。

思ったことが顔に出ていたらしく、晴哉さんはやんわりと苦笑した。

「憧れてたんだ。奥さんがご飯作って、お帰りって言うてくれて、他愛ないこと食卓で話したりするの。」

子供の時から、そんなことなかったから」

結婚してたのに？

「前の奥さんは、有能で仕事も出来る人だったから。彼女のしたいことに比べたら、俺の憧れなんて些細なものだし」

この人、凄く優しいんだ。

優しすぎて、自分のしたいことより、人のことを考えすぎてしま
う。

何て損な性分だろう。

家族でご飯なんて、少しの自分のわがままで叶う夢なのに。

「そ、そんなこと言うと、今度、お父さんとお母さん、夕飯に呼ん
じょうから！」

やばい。

声が涙ぐんだ。

必死に咳払いでごまかそうとしたけれど、出来てないのは、丸わ
かりだ。

晴哉さんは私をじっと見ながら、囁くように言う。

「俺、まさか、家を買おうとして、家族が出来るなんて思わなかつ
たんだ。

珠希さんには、いきなりだったろうけど、お義父さん、お義母さ
んと話して、こんな家族思いの人たちと、自分も家族になれば、
って思ってた……」

やめて、それ以上、言うな。
言わないで。

気づいたら、ご飯途中なのに、ボロボロと泣いていた。

そう、私のお父さんとお母さん、凄く素敵なの。仕事やめて定職
つけない一人娘のことをなんだかんだいいながら、それでも労って
くれて。

私の家って、家族って、ありふれた当たり前の家だけど、私にと
ってはかけがえのない家族で。

そういう暖かさに惹かれたなんて、寂しそうに言う人の心の内な
んて理解できないけれど、そういう暖かさに餓えていたのかって、
思うだけで胸が苦しくなる。

私にとって当たり前前に享受していたことを、今までずっと欲して
いた人が、今、目の前にいて、こんな焦げたカレーでも喜んで貰え
たら、私の簡単な涙腺は直ぐに崩壊だ。

「珠希さん、俺と結婚してくれてありがとう」

晴哉さんが立ち上がり、テーブル脇を通って私の横になると、ギ
ョツと私を抱きしめて、そう言った。

ふと、夕方の母の電話を思い出す。

『幸せになりなさいよ』

それは私だけじゃなくて、きっと晴哉さんにも向けられた言葉な

んだと長びいた。

5 我慢

「で、何でいきなり苗字が変わったわけ？」

結婚して、1ヶ月たったころ、数少ない友人にメールを送った。結婚しました、と。

そうしたら、近場に住んでいた親友から速攻で返信が来た。そして、速攻でランチの予約を取り付けられて、今に至る。

「彼氏が出来たとも聞いてないんですけど？」

そう言った親友の有香はこの上なく不機嫌な顔だ。その横では彼女に瓜二つの2歳になったばかりの娘の睦月ちゃんが、「まんま、まんま」とはしゃいでいる。

食い意地は有香に似たんだな、と思いつつ、この二ヶ月のことを話すと、あっさり、

「さすがおかあさんだね」と唸られた。

「初婚の根性悪選ぶなら、バツイチでも金持ってて性格いい男の方がいいわよねえ。しかも、子無しだから養育費むしり取られる心配もないし」

「でも、恋愛とか全くない状態から始まったから、変かも……」

「いいんじゃないの？ お見合いして直ぐ結婚する人もいるんだし。変な性癖とかなけりゃ」

性癖と、きましたか。

有香はかわいい顔して明けてだ。

ニヤニヤしながら、

「そっちの方も大丈夫なんですよ？」

なんて聞いてくる。

私は飲んでいたコーヒーをむせながら、

「睦月ちゃんもいるのに！」

と窘めたが、

「あたしの娘よ」

と開き直られた。

睦月ちゃんの将来が著しく心配だ。

「まあ、なんとか………」

おおっぴらにいうのも恥ずかしくてそう言えば、有香は「じゃあ、いいんじゃない」なんて返した。

「あっちもこっちもバツチリなんて、本の中だけよ。現実なんて、我が家なんかここ二年、ご無沙汰よ！」

明け透け過ぎます、有香さん………

「まあ、二人目欲しいし、旦那に精力剤でも飲ませるか、寝込み襲うかしよつとは思ってるけど」

ひい。怖い。

怖すぎる。

何だか聞いてはいけないことを聞いてしまった気がして、遠くをみていると、有香が聞いてくる。

「一緒にいて、我慢してることは？」

「は？」

「例えば犬飼ってるんでしょ？」

犬だけで自分見てくれないとかないの？」

カインは可愛い。

散歩しているせいか、私も痩せてきたし、最近は犬のしつけ方も、晴哉さんに聞いて勉強している。

晴哉さんにとってカインは家族だし、私にとっても家族になりつつある。たまに一緒に寝るし。

晴哉さんに関して我慢することってあんまりない。

別に夜の生活とかそんなにながつついてないし。枯れてはないけど、そればかりが人生じゃない気もするし。

苛つくこともあるけれど、一緒にいればそんなことは当たり前で、仲直りだって直ぐに出来る。

黙っている私を見ながら、有香はニヤニヤしている。

「流石、珠希のおかーさん。よくそんな好物件

見つけてきたね」

「どつという意味？」

「我慢出来ない人は、最初から我慢できないことがあるの。それが無いなら、大丈夫よ」

妙に自信のある言葉に、「そういうもの？」と問いかけてしまう。

結婚って、我慢だっという人もいるじゃない？

有香はにっこり笑うと、

「出来る我慢と出来ない我慢があるのよ」「
と言った。

「一月過ぎして、直ぐに我慢できないことが思い浮かばないなら、
相性いいのよ」

「そ、そうかなあ？」

「そうよ。ということだ」

有香は鞆を「ごそごそ漁ると、

「結婚祝。今まで出してたぶん、きっちり回収しなさい」とご祝儀までくれた。

夜、帰宅した晴哉さんと食後にソファでまったり寛いでいた際、有香の話と、貰ったご祝儀のことを言った。

晴哉さんは

「それじゃ、今週末はお返しを買いに行こうかと、提案してくれた。」

「半返しだろうから、このご祝儀から出すよ」

「そのお金は珠希さんのお小遣いとして、何か買いたい時に使ってお返し代は家計から出そう」

「でも……」

「一緒に選ばせて」

穏やかな笑顔で晴哉さんは意外に強引だ。

と言つても、それは私が困ることで強引なことは一つもなくて、むしろめたくたに甘やかされているのが分かる強引だ。

「晴哉さん、私に甘すぎ！」

晴哉さんの知らないところで、私、無駄遣いしてるかもよ？」

「珠希さんはしないよ。家計1ヶ月も預けていれば分かる」

断言されたら、何も返す言葉はありません。

家計預かっているとと言っても、入ってくるお金が予想以上に多いのだ。今まで親からお小遣いを恵んで貰っていた身としては、ありすぎるお金にビクビクしながら、買い物したりした。

食費はいくらぐらいがいいのかとか、お母さんにこっそり電話し

たのは内緒だ。

「でも、保険とか入らせて貰ってるし、
そうなのだ。」

　　齡30にして初めて医療保険にも加入した。

　　勿論、晴哉さんの口座から自動引き落としだ。晴哉さんの主契約に便乗した形だけど、帝王切開なんかも出るらしいので、と言われ
て加入した。

　　というか、子供出きること前提なのが、びっくりだ。

　　まあ、出来る覚えはあるけれど、前の奥さんとは出来なかったんだし、私とも出来ないとは考えないのだろうか？

　　むにやむにや考えていたら、

「何、どうしたの？」
と聞かれてしまった。

　　流石に、今回の結婚でも子供出来ないとは思わないのかなんて、
聞けるわけがないので、

「晴哉さん、何か我慢していることあります？」

　　と、昼間の有香との話を話題に出す。

「我慢？」

「私のいびきがうるさいとか、トイレが臭いとか、何でも」

　　晴哉さんはうーんと唸ってから、ふと気づいたように目を見開いた。
た。

「一つ、あるかな」

「ええっ!？」

　　自分で聞いておいてなんだが、凄く意外だった。

　　何て言うか、日々泰然としていたから、我慢とかしている風には

見えなかったのだが、どうやら晴哉さんに我慢を強いていたらしい。今更ながらにドキドキする。

どうかそれが出来る我慢でありますように、と願うくらいには、二人の生活は居心地が良くなっていた。

だって、波長が合うのだ。

テレビを見てて、笑う場面、怒る場面、思いついて話しかける場面、それで話が食い違ったことはない。

最初は私に合わせてくれているのかと思ったが、そんなわけではなく、考え方とか、話すタイミングが似ているのだろう。

男の人と付き合うとき、そんなこと気にしたことがなかったから、実際晴哉さんと結婚してみても、そう言った目に見えない部分の相性の大切さってのを、身を持って実感していた。

「な、何、我慢しているの？」

恐る恐る顔をあげて、晴哉さんに問いかけると、晴哉さんは晴哉さん独特の、やんわりした微笑を浮かべてから、ちゅ、と私にキスしてきた。

「……」

そういうことはベッドの中でだけだったから、かなり動揺してアワアワしてたら、晴哉さんに抱きしめられて、ぼやかれる。

「俺って、性欲そんなにないと思ってたし、多分これから衰える一方だと思っただ」

い、いきなり何の話?!

「だけど、付き合い始めだからかな？」

珠希さんと無性にイチャイチャしたくなるんです」

「い、イチャイチャ、ですか」

「うん。だけど、こういうのって落ち着いてくると減ると思うから、今、ガツガツするのって、後で減ったときに何か思われちゃうかな、とか考えて、我慢してる」

そ、そういう我慢ですか。

思いも寄らないものだった。

草食系だと思いきんでいたから、そっちは回数少ないことが当たり前だと思っていたのだけど、そんなこともないんですね。

そっぴや、付き合い始めて、結構猿みたいにガツガツするよな、なんて実体験で思い出す。

「が、我慢しなくていいよ？」

上目遣いで晴哉さんを見上げれば、晴哉さんは困った困ったとぼやく。

「俺、そんなに若くないのになあ」

なんて言われた次の瞬間、膝裏に腕を差し込まれて、よっ、とお姫様だっこされた。

「う、うひゃあー!!」

まさか、この歳でお姫様だっこ!

最近、カインの散歩で少しは痩せたけど、それでもお世辞にも軽い方じゃない。

案の定、晴哉さん、少しよろめいた。

「お、お、降ろして!」

「ん？ 頑張らせて」

につこり微笑まれて、そのまま寢室に連れてかれる。階段とかひ
いって声上げるほど怖かった。

.....

.....

結論。

結構、色々我慢させていたみたいだけど、私と晴哉さんはもっと
仲良くなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5632z/>

庭付き4LDK中古住宅 リフォーム済嫁付

2011年12月24日06時48分発行